

シリーズ「一品の世界」 第4回

古図をよむ ―桶川宿古絵図―

令和元年10月27日（日）午後2時

桶川市歴史民俗資料館 紅谷有美



この古地図は、その来歴は不明ですが、桶川宿本陣家（府川家）に伝来したものです。

桶川市歴史民俗資料館は、その設立に至る資料調査によってこの絵図を中山道桶川宿の姿をあらわす貴重な資料として認め、府川家の協力を得て、常設展示資料とするために修復したものです。

本日の講座、シリーズ「一品の世界」では、この「桶川宿古絵図」をもとに、中山道桶川宿の姿を考えてみましょう。

1. 桶川宿の沿革

桶川宿古絵図は、以下の特徴をもっています。

- ・市神社がないこと
- ・木戸が明確に描かれていること

これらのことから、この絵図は桶川宿が開かれたころの姿を伝えていると推定されます。そこで、桶川宿の沿革について触れてみたいと思います。

(1) 中山道桶川宿

中山道は、徳川家康が天正18年（1590）に江戸に本拠を置いた後、五街道の一つとして整備が進められました。その後、関ヶ原の合戦を経て、江戸幕府による全国支配が確立する中で、街道と宿駅の整備が進み、伝馬制度が整えられていきます。

桶川宿は、中山道の江戸から北へほぼ十里を隔て、6番目の宿場として開かれました。しかしながら、宿場が開かれた時期や開創者など、その沿革の詳細は不明です。

宿内の浄念寺境内にある正徳年間（1711～1716）に建てられた「薬師如来聖徳太子作」と刻まれている灯籠を兼ねる供養塔には、西尾隠岐守吉次の没年である慶長11年（1606）の年号とともに「当駅開闢西尾隠岐守」との文字が見られます。西尾隠岐守吉次は、天正18年（1590）、家康の関東移封にともない武蔵国足立郡原市に5000石の所領を与えられ、上尾宿や桶川宿を支配しています。このことから、桶川宿は、慶長年間を経て元和4年（1618）に及ぶ西尾氏の支配の下で開かれたと考えられます。

また、中山道の整備は、小室領と鴻巣領を支配し、関東代官頭として検地や治水、街道の整備を主導した伊奈備前守忠次によって進められました。

(2) 桶川宿の姿

寛永12年（1635年）には参勤交代が公式に定められ、このころ、宿と伝馬制度が確立しました。桶川宿における寛永年間の家数58軒は、宿が負っていた馬50匹と人足50人の伝馬役に由来すると思われます。

この当時の町並みは、街道沿いの農村といったものであったと思われます。

桶川宿の姿を旅人の目から



参考資料「江戸図屏風」に描かれた鴻巣宿

見た資料として、豊後国岡城主の妻が著した旅日記である『伊香保記』があります。この日記では、田舎びた宿の姿が記されています。

「むさしとてそこぬけとおるおけ川にしはしととむるとはうるさし」

また、江戸時代初期の街道と宿の姿を具体的に知ることのできる絵画資料として、徳川家光の治世である寛永11年（1634）年前後に描かれたとされる『江戸図屏風』があります。ここには、鴻巣宿の町並みが鴻巣御殿とともに描かれています。

（３）宿勢の変遷

桶川宿の宿勢

暦年	寛永 2 年 (1625)	寛文 11 年 (1671)	宝暦 5 年 (1755)	寛政 12 年 (1800)	文化 2 年 (1805)	天保 14 年 (1843)	嘉永 2 年 (1849)	慶応 2 年 (1866)
家数	58	106	260	247	255	347	355	358
人口		405	1112	1049	1063	1444	1511	1620

平和の中で新田開発や治水が進み、社会の基盤となる本百姓を主体とする近世村が確立したといわれる寛文年間（1661～1673）には、桶川宿の戸数は宿開設当初に比べ倍増しています。

さらに江戸時代中期にあたる18 世紀半ばの宝暦 5 年（1755）には、家数は260 軒、人口は1112 人に達しています。同年の『桶川宿高反別並ニ諸品書上帳』には、以下のように記されています。

「耕作の間... 茶屋駄賃取小揚取等致し候外稼無御座候」

未だ農業を主な生業にしながら、往来する人々の荷駄の継ぎ立てを副業にする宿場の姿をうかがうことができます。

2. 桶川宿古絵図を読み解く

（１）概要

この絵図を伝えた桶川宿本陣府川家は、幕末期に幕府代官に提出された同家の由緒書によると、先祖である越前（福井県）出身の大野秀利が天正年間（1573～1593）に浪人し、当所に来住することになり、2代目の当主が府川甚右衛門を名乗り、寛永年間（1624～1645）に本陣並びに問屋名主役を勤めることとなったと記されています。

桶川宿は、江戸時代に入り、新規に取り立てられた宿村であるといわれ、上尾市東部から広がる桶川領（郷）の北部に設けられました。

この古絵図の来歴は不明ですが、桶川宿を描く絵図としては最大のもので、中山道沿線だけではなく、宿村全体を描いています。

また、宿場の施設が詳細に描かれていることから、比較的古い時代の宿場の構造を知る貴重な資料です。

古絵図に描かれた中山道に沿って、上の木戸から下の木戸までの間に記された人名は115人であり、寛文11年（1671）の家数106軒に近い数となっています。このことから、この古絵図が、寛文期から元禄期頃に描かれたと推測することができます。

（２）作成の背景 ―検地と秣場（まぐさば）争論―

村絵図が描かれる動機として、以下の二つがあげられます。

ア．検地水帳

江戸の村は、領主への貢納の村請を行っていた。土地の台帳というべき「検地水帳」を村が保管し、これを裏付ける絵図を作成する。

イ．争論

土地をめぐっては、隣接する村同志の争論が発生する。争論は自治の中で解決していくことを基本とするが、場合によっては領主を巻き込む争論に発展することもある。

争論の過程で絵図を作成し、村落間の調停や訴訟の論拠とする。

桶川宿では元禄7年（1694）に検地が行われており、この絵図は検地水帳と対応する土地の所有を記録したものとも考えられます。

また、元禄年間（1688～1704）には、秣場争論が多発し、各地に争論の過程で作成された絵図が伝えられています。秣場争論とは、江戸時代前期に盛んに行われた新田開発によって縮小した林野の用益を巡って、隣接する村々が争ったものです。当時、林野は、馬の飼料を得ることばかりではなく、燃料や建築資材の確保、さらには田畑の地力を保つ緑肥となる草を刈り取るなど、村の生活に欠くことのできないものでした。

この絵図には、宿村の西側に「西原馬草場」「馬くさ場」の表記があり、牧野八太夫、牧野半三郎知行所と記された箇所には、名主2名が署名の上、境に加判がなされています。このことは、石戸領に属する上日出谷村と下日出谷村と桶川宿の間に秣場の争論があり、その調停のために絵図が作成されたとも考えられます。

以上のことから、この桶川宿古絵図は、元禄年間あたりに作られたと考えられます。このころは、江戸時代の村が確立した時期にあたるといわれています。秣場争論も平和の中で開発が進む中で起きたことであり、江戸時代の当初から形作られた街道と宿場の有様もこの時期に定まったといわれています。

3. 宿場の姿 ―桶川宿古絵図―

この桶川宿古絵図から、当時の桶川宿の姿を考えてみましょう。

(1) 土地利用

【林野】

林野は、緑に彩色されています。

古絵図全体を眺めてみると、北東には大久保山と小山、北に北原、西には西原と永窪原がそれぞれ広がっています。

小山と大久保山には、それぞれ「野銭場」と付記されています。西側の山林には「馬草場」とあり、ともに、秣や薪、緑肥などを得る大切な場であったことがわかります。

また、いなり明神、白山権現、神明宮のあたりには境内林があり、上村との境付近には大奴田山といった山林の表記もみられます。

【水路】

水路は、白く塗られて表現されています。

南には、井戸窪原、水窪原といった湿地を思わせる地名が記されています。このあたりから、井戸木村方向に水路がはしっています。これは、鴨川の水源のあたりをしめしています。

また、中山道の北側に、坂田村から上村にかけて、長く横に描かれた白線が見られます。この長い水路は芝川にあたります。

そして、上の木戸の外、観音堂のところから発し、北に流れる水路が見えます。観音堂のあたりは、桶川の古老に「かんのんばら」と呼ばれており、水が出るところと伝えられています。

桶川宿内の水路に目を向けると、大雲寺の周りの水路は中山道を横切って、稲荷神社付近をとって芝川に落ちています。浄念寺あたりの水路も、中山道を横切って、芝川に向かっています。中山道を横切る地点では橋が描かれています。

【耕地】

田の表記は芝川に沿ってみられます。その他はほとんど畑であると考えられます。絵図には人名が記されており、その耕地の所有者を表していると考えられ、検地水帳に対応していたのではないかと推測されます。

芝川付近の東寄りを見ると、桶川宿の田畑と上村の田畑が入り組んでいることが分かります。

中世の桶川郷（領）は、芝川に沿って現在の上尾市域に広がっていました。田畑の分布は、古くから芝川に沿って人びとが暮らしてきたことを示しているのではないのでしょうか。

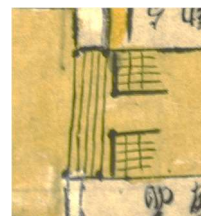
（２）中山道と桶川宿の施設

江戸時代前期にあたと考えられる街道と宿を詳細に描いたものとして、この絵図は貴重な資料であるといえます。宿内の施設を確認してみましょう。

【木戸】

宿の出入り口に設けられた上下の木戸の間が宿とされました。木戸には木戸番が立ち、夜間は防犯等の目的で閉鎖されていました。

桶川宿古絵図には、柵状の木戸が、上、下の出入り口にはつきり描かれています。



【高札】

村の高札には、切支丹禁制など幕府や領主の最も基本的な法令を書き記した木の札（高札）を掲示していました。

桶川宿の高札場は、宿の中央、問屋場のあたりに設置されており、ここが宿の中核施設であることを表しています。問屋場には人足50人と馬50頭が常備されており、高札には、通行人に提供される人馬の賃金の定めが掲げられていました。

このあたりの住人として、「源三郎」と「太郎兵衛」の名が記されています。両者は、本陣府川家と並んで桶川宿の名主と問屋役を務めていた脇本陣内田家と千代間家にあたります。



【一里塚】

一里塚とは、江戸日本橋を起点として一里（4 km）ごとに塚を築き、旅のしるべとしたものです。

桶川宿の一里塚は宿内にあり、大雲寺あたりから芝川に落ちる水路が中山道を横切る橋のたもとに築かれていました。塚の上には杉が植えられ、その根元には、妙見様を祀る石の祠があったそうです。



【橋】

浄念寺の前と大雲寺の前には橋が描かれています。桶川宿は、現在の北本市よりから、上町、中町、下町といった町名をもっており、中町はさらに上中町と下中町にわかれていました。

大雲寺近くの橋は上町と中町、浄念寺近くの橋は中町と下町の境界となっていました。

現在、浄念寺そばの歩道橋は、かつての橋があったところに位置し、橋脚のたもとに、「境橋」と刻まれた石柱が残されています。

(3) 桶川宿の社寺

【浄念寺】

清水山浄念寺は、桶川宿の下の寺と呼ばれる浄土宗の寺院です。その開基は、戦国時代にあたる天文15年（1546）にさかのぼると伝えられています。

中山道の宿では、鴻巣宿の勝願寺が高い格式を誇るように、浄土宗の寺がよく見られます。これは、江戸に幕府を開いた徳川家やその家臣団が浄土宗に深く帰依していたことともかかわるかもしれません。

現在も残る鐘楼門は、元禄14年（1701）に再建されたと伝えられ、桶川宿最古の建造物です。

この寺の境内には、桶川宿に暮らした人びとの信仰を物語る念仏講の供養塔や、現在も職人衆の信仰を集める聖徳太子を祀る太子堂が現存します。



【大雲寺】

龍谷山大雲寺は、弘治3年（1557）に開山された釈迦如来を本尊とする曹洞宗の寺院です。

大雲寺の墓地には、本陣職をつとめた府川家を始めとする宿場開設以来の家々の墓石が並び、桶川宿の歴史をしのばせてくれます。

また、清水の湧く池もあったと伝えられています。かつては、境内に隣接して白山社が祀られていました。



【観音堂】

上の木戸を出た宿のはずれに「観音堂」と描かれています。詳細は分かりませんが、与楽寺と呼ばれ、馬頭観音を祀っていたといわれています。明治に至り、観音堂は廃され、与楽寺の馬頭観音は大雲寺に納められました。

古老は、現在マメトラ農機の工場や商業施設となっている西2丁目あたりのことを「かんのんばら（観音原）」と呼びならわしていました。



【南蔵院】

稻荷山南蔵院は、真言宗の寺で当山派修験の寺であったと伝えられています。明治に至ると、新政府による神仏混淆禁止、修験禁止令を受けて、明治2年（1869）に廃寺となりました。

浄念寺と大雲寺が、桶川宿の人びとの檀那寺として墓地をもち、人別を管理していたのに対し、修験であった南蔵院は民間信仰を司る寺として役割を果たしていました。

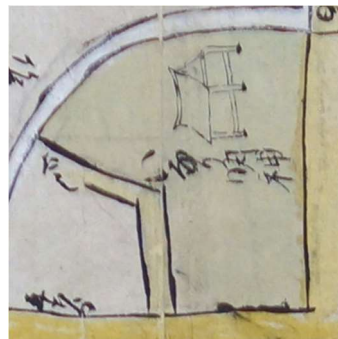


それゆえ、南蔵院は、桶川宿内の全ての神社の別当を勤め、現在の稲荷神社にある紅花商人寄進の石灯籠は、南蔵院の下にあった不動堂に寄進されたものです。

【いなり明神】

古絵図に「いなり明神」と記されている稲荷神社は、江戸時代、山伏の寺であった南蔵院のもつ社であったと記録されています。

中山道桶川宿の鎮守は、神明社（神明宮）であったとされていますが、今も境内に残る安政6年（1859）に建立された頌徳碑の文には「…桶川駅鎮守正一位稲荷大明神…」と刻まれ、桶川宿の心のよりどころとなっていたことがうかがわれます。



【神明宮】

宿の東方のはずれ、中山道の南側に描かれています。『新編武蔵風土記稿』によると、「宿の鎮守にして南蔵院持」とあります。古くは宿の鎮守であったことが分かります。

神明社とは伊勢皇大神宮の分社で、江戸時代に入ると伊勢御師の布教によって全国に広がっていきました。



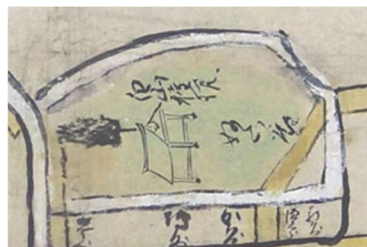
【白山権現】

大雲寺の傍に描かれています。白山神社は、中世から加賀（石川県）の白山修験によって全国に信仰が広がっていった社です。

この社も、江戸時代には宿内の修験である南蔵院が支配していました。

境内は古杉や老松が生い茂り、境内には清水が湧き出す沼があったと伝えられています。

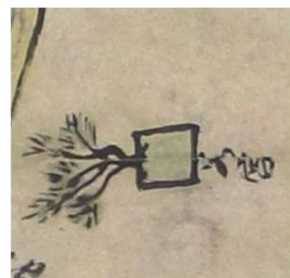
白山権現社は、明治に至り、稲荷神社に合祀され、その拝殿は稲荷神社の神楽殿となっています。



【若宮】

宿の南方に、「若宮」と記された社が描かれています。このあたりは鴨川水系の源流地帯にあたり、湿地に面する社であったと考えられます。

また、近くには戦国時代の古文書である「市場之祭文」に記された「いっきほりの市」にゆかりのある地名が古絵図にも記されています。



三井精機株式会社が昭和15年（1940）に設立されるにあたり、この付近に寮舎が建てられました。これを若宮寮と呼んだのは、この社にちなんだものであると思わ

れます。

一旦、廃された若宮社ですが、戦時中に三井精機桶川製作所によって再興され、現在も桶川中学校近くに現存しています。

4. その後の桶川宿 ―中山道分間延絵図―

歴史民俗資料館に展示されている桶川宿古絵図は、元禄時代頃、すなわち江戸時代前期の末頃の桶川宿の姿を伝えていると考えられます。

その後の桶川宿の姿を知る第一級の資料が「中山道分間延絵図」です。この絵図を手がかりとして、江戸時代後期の桶川宿の姿を見てみましょう。

(1) 中山道分間延絵図

中山道分間延絵図とは、幕府の命令によって道中奉行が寛政12年（1800）から作成を始めたものです。完成した測量絵図である「五街道分間延絵図」は、全九十一巻に及び、中山道分間延絵図はその一部です。

分間延絵図はほぼ1/1800 の縮尺で作成されており、その描写は、本陣や社寺などの主要建物や橋などの施設はもちろんのこと、往還の家屋についても屋根の形状を描きわけなど、詳細を極めています。

なお、幕府は、絵図作成事業の開始とともに、街道の宿勢の調査を開始しています。桶川宿が、寛政12年（1800）に道中奉行に提出した「桶川宿分間絵図仕立御用宿方明細書上帳」（桶川市史所収）には、「宿内泊食其外諸商人八拾三軒」と記され、当時の家数247軒の内、83軒が旅宿あるいは農産物取引などの商業に従事していたことを知ることができます。

また、この中山道分間延絵図は、文化年間に描かれたといわれ、桶川宿の過半を焼亡した寛政10年（1798）の大火の後の復興した町並みを描いていると思われます。

延絵図に描かれた桶川宿の町並みには、周辺の他の宿場に比べ瓦葺き平入りの町屋が多く見られるようになっています。

このことは、桶川宿が、災害からの復興を遂げる中で、農業のかたわら往還の稼ぎ（旅籠馬方など）を営む宿村から、近郷から紅花や麦などの産物を商う在郷町へと宿場の姿を変えていったことを表しているのでしょう。

(2) 中山道分間延絵図からみる桶川宿

古絵図が作成されてから約100年を経過した後に描かれた中山道分間延絵図の桶川宿の姿から、町並みの移り変わりについて考えてみましょう。

【町並み】

宿の家数が増え、下町は上尾宿に向けて拡大しています。家並みも総じて切妻平入の町屋が並び、土蔵も数多く描かれています。

延絵図では瓦葺、藁（茅）葺、板葺、土蔵などの別が描き分けられています。桶川宿中心部から下町にかけてはとくに瓦葺の町屋が多く描かれています。



また、街道の幅ですが、宿の内外で大きな差がなくなっています。延絵図は詳細な描写を行っているために、宿内の街道沿いには悪水落としの水路もみられます。

このような街並みとなったことは、「桶川宿分間絵図仕立御用宿方明細書上帳」の記述のとおり、宿内で商売を営む家が増えていったこととかかわることと推測されます。

また、瓦葺の家屋が上尾宿や鴻巣宿に比べて多くみられることは、寛政10年(1798)の大火によって家並みの過半が失われたことを契機として、防火のために瓦葺を進めたことによるものと考えられます。本陣建築も座敷構は完全に瓦葺として表現されています。

【木戸】

桶川宿古絵図には明確に木戸が描かれていますが、延絵図では木戸の表現は見当たりません。宿村の境には「傍示杭」がみられ、宿の入口には「宿入口掟杭」の表記がみられます。

さらに上尾宿よりの宿入口には門が描かれた施設があり、入口の番小屋であった可能性もあります。



【本陣と脇本陣】

桶川宿本陣府川甚右衛門家の建物は特に詳細に描かれています。

本陣の前には街道との間に広場があり、その奥に門、そして瓦葺きの座敷構の棟が連なっています。さらに座敷構に隣接する勝手構の板葺き屋根の母屋を見ることができます。

本陣の向かいには脇本陣の表記が見られます。ここは内田源三郎家です。桶川宿では本陣は府川家のみですが、脇本陣内田家の屋敷は他の宿場の本陣に匹敵する規模であったことを記録から知ることができます。

また、脇本陣内田家とともに脇本陣を勤めた武笠惣兵衛家



については、規模も小さいことから、しばしば休役しています。『桶川宿分間絵図仕立御用宿方明細書上帳』にも記載がないため、延絵図にも脇本陣として描かれなかったものと思われます。

【高札と問屋場】

脇本陣の前には高札と記されており、この位置は「桶川宿古絵図」と変わっていないようです。人馬の継ぎ立てを行う問屋場は、参勤交代の大名を泊める本陣とともに宿場に必ず置かれた施設です。

桶川宿の問屋場は、当初、決まった建物がなかったといわれていますが、延絵図では脇本陣の隣に記されています。問屋場の支配は、名主家4家が交代で勤めていたといわれています。

桶川宿の名主は、府川家、内田家ならびに武笠家のほか、千代間太郎兵衛が勤めており、延絵図に記された問屋場は千代間家の建物が利用されていたのかもしれません。

【市神】

桶川宿古絵図に見られなかった宿場の施設として、市神があります。社殿は、上中町の路上にあり、近くには脇道と記された菖蒲町への道が中山道から分岐しています。

市神の創設の詳細は伝えられていませんが、祇園牛頭天王を祀り、その祭礼は江戸時代中期にあたる元文3年(1738)に始まったと伝えられています。

桶川宿では、五と十のつく日に市が開かれ、麦や紅花など近隣の産物がここに集まりました。分間延絵図が描かれたころには、紅花が桶川臙脂の名で特産物として知られるようになり、在郷町の発展の中で市神が祀られるようになったのでしょう。

明治に至り、市神の社は八雲社として稲荷神社の境内に移されましたが、市神の祭りとして始まった桶川祇園祭は桶川宿以来の伝統を今に伝えています。



【川越道と菖蒲道】

桶川宿古絵図には、下の木戸から西に分岐する街道が描かれています。分間延絵図ではこの道は「川越道」とあり、川越と併せて川田谷村への里程が記されています。

桶川宿は、中山道沿線の宿場ではもっとも川越に近く、この道は荒川の河岸を超えて川越に至り、ここで新河岸川の舟運につながります。

一方、市神の近くで北に分岐する脇道には、菖蒲町と騎西への里程が記されています。菖蒲町は桶川宿と同様、産物の集散地として栄え、近辺で見沼代用水の舟運と接続し、中山道桶川宿と日光街道の宿を結ぶ交通の要衝でもありました。

これらの道は、中山道桶川宿への産物の往来、そして助郷の人馬が通う道として宿場の繁栄を支えていました。